

栃木県出流原遺跡出土の土師式土器

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学史学地理学会 公開日: 2009-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊野, 正也 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/1582

栃木県出流原遺跡出土の土師式土器

熊野正也

一、はじめに

昭和三十九年五月、佐野市教育委員会より明治大学考古学研究室へ、同市立出流原小学校校庭にプールを建設したので事前にその地点を調査してほしいという要請があった。

ここからは以前に弥生時代中期に属する壺形土器(註一)がほぼ完全なすがたで発見されていたので当研究室ではそれに注目し、ただちに佐野市教育委員会の要請に応じた。

この調査は、緊急調査と予備調査とをかねて約一週間行なった。その結果、おびただしい量にのぼる弥生式土器や縄文式土器の破片が発見され、それに加え完全な土師式土器五個が一括発見された。

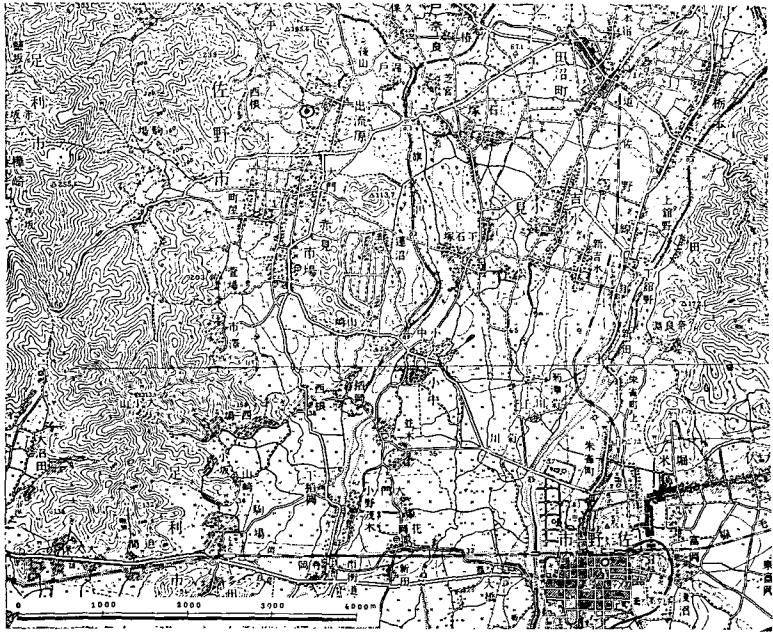
今回の調査でとくに注目したことは、弥生時代中期に比定できるピット状の遺構が発見されたことである。

昭和三十八年、千葉県佐倉市に位置する天神前遺跡(註二)を調査して、この時期の墓址群の性格をあきらかにできた際であったので、それらとの関連から出流原遺跡は貴重な存在となった。

そこで当研究室では、佐野市教育委員会と共同で昭和三十九年十月三十一日から十一月二十一日までの二十日間を第一次調査(註三)とし、昭和四十年六月一日から同十九日までの十日間を第二次調査(註四)として、それぞれ実施した。

その成果等については、すでに日本考古学協会第三十一回春・秋の総会研究発表において報告したとおりである。出流原遺跡は、そのように弥生時代中期の墓址群として学界に注目された。

しかし、出流原遺跡が弥生時代中期の墓址群として有名になればなるほど、他の時期の遺物が陰に消える可能性が



第一図 出流原遺跡の位・置

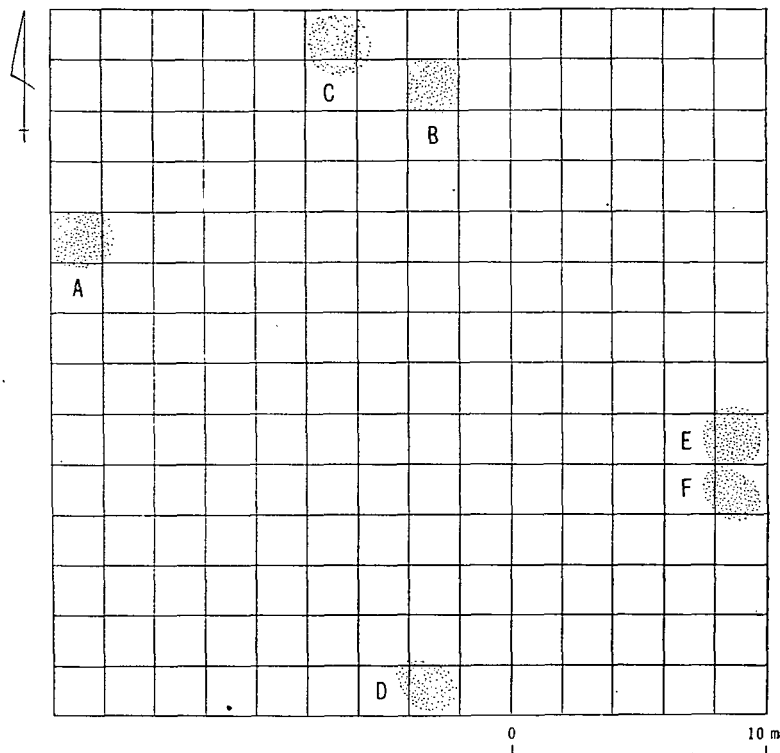
あったので、ここでは、とくに興味深い出土状態をしめした土師式土器について報告したいと思う。

二、遺跡の位置と立地

出流原遺跡は、栃木県佐野市出流原にあり、市街地から北西に約六kmの地点に位置している。遺跡は出流原小学校校庭及びその西側地域一帯におよんでおり、この遺跡をもつ低い台地の西側裾には出流川が流れている。

出流川の源は、この遺跡から北西四百mのところにある弁天池である。ここは地下水が古生層石灰岩の亀裂により湧き出してできたもので、水の鮮明度は非常に高く、水量も豊富である。

ここ弁天池から流れ出る水は、出流原遺跡の西側を急いよく流れており、またその川と接して、西側一帯に広大な水田が開けている。一方、遺跡のある台地では、起伏も少なく、きわめてなだらかで、そのほとんどが畑地となっている。



第二図 土器群の位置

本遺跡より出土した土師式土器は、第二図にしめしたごとく、方々に点在していた。すなわち、A・B・C・D・E・Fの地点がそれである。そして、それらの土器は、各地点において、単独に発見された例はなく、ある地点では六点、あるところでは四点というように各々群をなしているように解釈ができるので、それらのものを、それぞれA群・B群・C群・D群・E群・F群とすることにし、また前回の予備調査で発見した五個の土器群をG群とすることにした。G群の発見した位置は、E・F群より東に約5mのところにある。

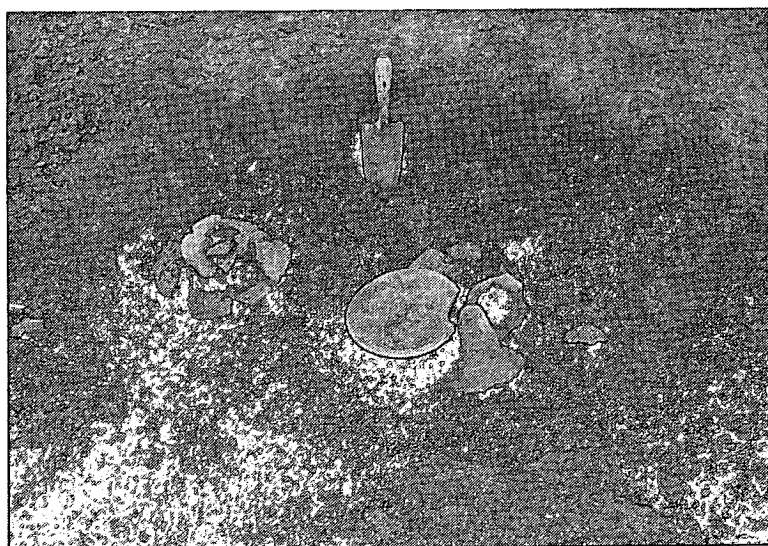
その各土器群の位置は、本遺跡の中心で約二十八平方mの範囲内で発見されている。それも、各土器の保存状況は極めて良好であった。

しかし、これらの土器が発見されている地域の北側、すなわちB群とC群の付

三、調査区域と土器群



第三圖 出流原遺跡A群土器出土狀況



第四圖 出流原遺跡B群土器出土狀況

近は、表土からロームまでの層の厚さが非常に薄く、さらに畑地という条件から、当然攪乱されているものと思われるが、量的に少ない割合に、幸いにも完形の高環形土器二個と甕形土器一個、それに土師式土器片を発見することができた。

それでは、各群の土師式土器について、とくに整形手法を中心に説明してみたいと思う。

四、土 器

A群

甕形土器（五図1）器高二三・七cm、口縁部径十七・五cm、最大径二三・二cm、底部径七cm。口縁部は外反し、口縁端に浅い沈線をめぐらす。胴部は球形に膨み、最大径を胴部の中央に有する。器面の整形は主に篋によるもので、僅か胴上半部において刷毛による手法がみられる。なお、内面では輪積の痕跡が明瞭であり、その整形として篋の荒削りが目だつ。胎土には小石が若干含まれ、また焼成は緊緻とはいえない。色調は暗褐色を呈し、器全面に煤が付着している。

甕形土器（五図2）器高二一・五cm、口縁部径十六・五cm、最大径十九cm、底部径五・五cm。口縁部が大きく外反し、最大径を胴部中央より下部に有する。器面の整形は、口縁部の内外面において横になでた痕跡がみられ、胴上半部の外面では刷毛、下半分では篋による手法がそれぞれ認められる。しかし胴中央部では器面が剝離され、ところどころが明瞭ではない。一方内面においては篋による荒削りが顕著である。胎土には小石を多量に含み、焼成は不良である。色調は暗褐色を呈し、胴下半部に煤が付着している。

高環形土器（五図3）器高三三・五cm、口縁部径十五・三cm、脚裾部径十三cm。一端、坏部と脚部の接合部でくびれ、口縁および脚裾に至って大きく開き、接合部において明瞭な稜をもつ。脚部は中頃にいたっていくぶん膨みをもっている。器面の整形は全て篋による手法で、縦に走る痕跡がみられる。脚部内面においては輪積の痕跡が篋によって荒削りが行なわれている。色調は褐色を呈し、坏部内面の一部と脚部の一部には黒い斑点をみる。

高坏形土器（五図4）現高十二cm、脚裾部径十二cm。坏部の口縁を欠損している。坏と脚の接合部は極めて厚い。器面は全て篋によって整形されている。胎土には小石が含まれ、また焼成も不良なので器体は以外に脆い。脚部内面は輪積痕が篋によって荒く削られている。色調は暗褐色を呈する。

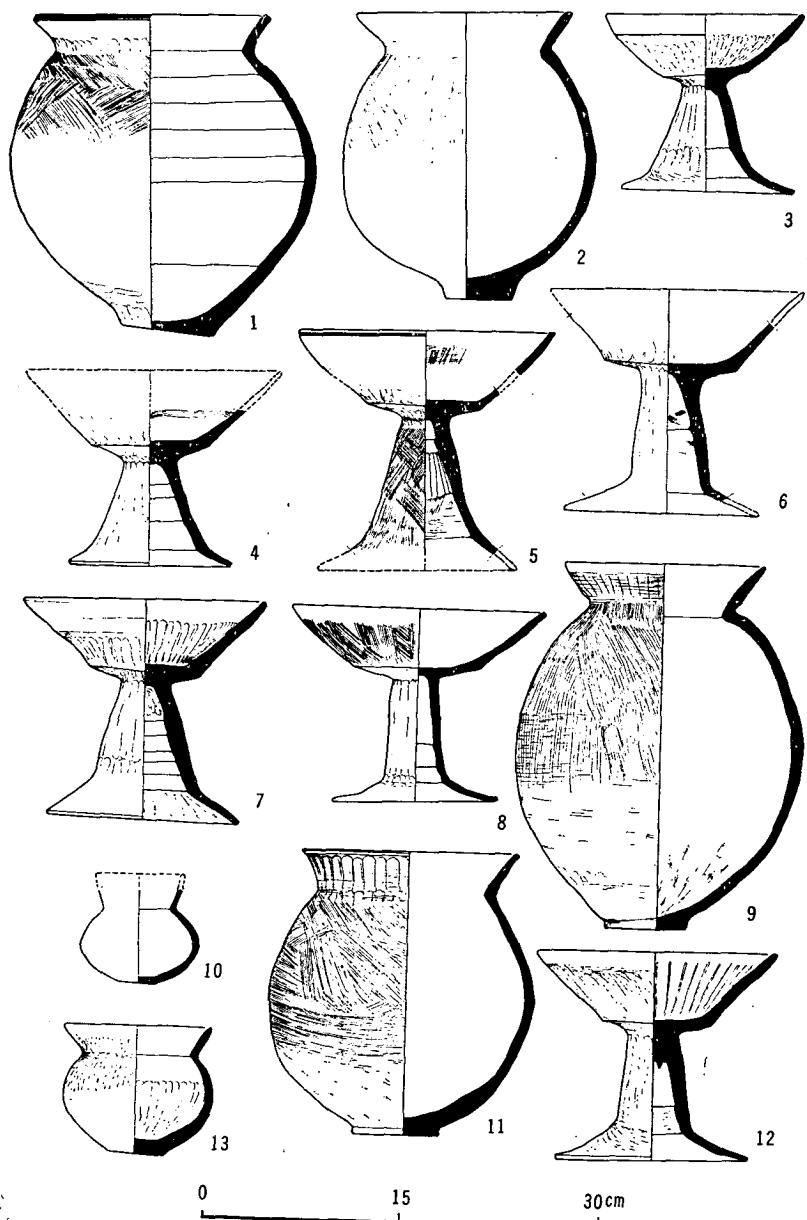
高坏形土器（五図5）現高十七cm、口縁部径十九・五cm。坏部の中頃と脚裾部を欠損している。坏部と脚部の接合部に稜を有する。器面の整形は坏部が篋、脚部が刷毛によってそれぞれ整形されている。胎土には若干小石を含むが焼成が良好なため器肉が堅緻である。しかし風化による器面の剝離がはなはだしい。色調は暗褐色を呈する。

高坏形土器（五図6）現高十四・五cm、口縁部と脚裾部を欠損している。坏部と脚部の接合部に明瞭な稜を有している。脚部はほとんど膨みをもたず裾部に至って曲折する。器面の整形は全て篋による手法で縦に走る痕跡を残す。ただ脚部内面においては横走の整形痕がみられる。色調は茶褐色を呈する。

B群

高坏形土器（五図7）器高十六・五cm、口縁部径十八・五cm、脚裾部十・五四cm。坏部と脚部の接合部に稜を有し、脚部は裾部に至って膨みを大きくする。器面の整形は、口縁部の内外面と脚裾部の内外面に横なで痕が顕著で、その他の部分は全て篋による整形手法でなされている。坏内部の底面には、一定の間隔をもって篋で押捺し、さらにその上面へ、下から上に放射状の痕跡がみられる。また脚部内面においては、おそらく指による整形であろう、縦に走る痕跡が認められ、その中央下には輪積の痕をそのまま残している。裾部では坏内部でみられた放射状の痕跡と同じものが明瞭である。胎土には小石が若干含まれている。焼成は極めて良好で、色調は黄褐色を呈す。

高坏形土器（五図8）器高十四・六cm、口縁部径十九cm、脚裾部十二・五cm。坏部と脚部の接合部に稜を有する。口縁部と脚裾部の内外面には横なでの痕がみられる。脚部はさほどの膨みをもたず裾部に至って曲折する。器面の整形は坏部において刷毛、脚部においては篋による手法が用いられている。坏内部には（五図7）と同じように放射状の裾跡がみられる。胎土、焼成ともに良好で器肉は極めて薄い。しかし坏内部の底面は風化による剝離がはなはだしい。色調は黄褐色を呈する。



第五图 出流原遺跡出土土器実測図

C群

甕形土器（五図9）器高二十七・五cm、口縁部径十五・五cm、最大径二十一・五cm、底部六cm。口縁部が大きく外反し、最大径が胴部のほぼ中央にある。器面の整形はほとんどが刷毛による手法を用いているが内面においては篋による荒削りが顕著である。胎土には小石が若干含まれていて、焼成は良好である。色調は黄褐色を呈し、胴下半の一部に黒い斑点をみる。

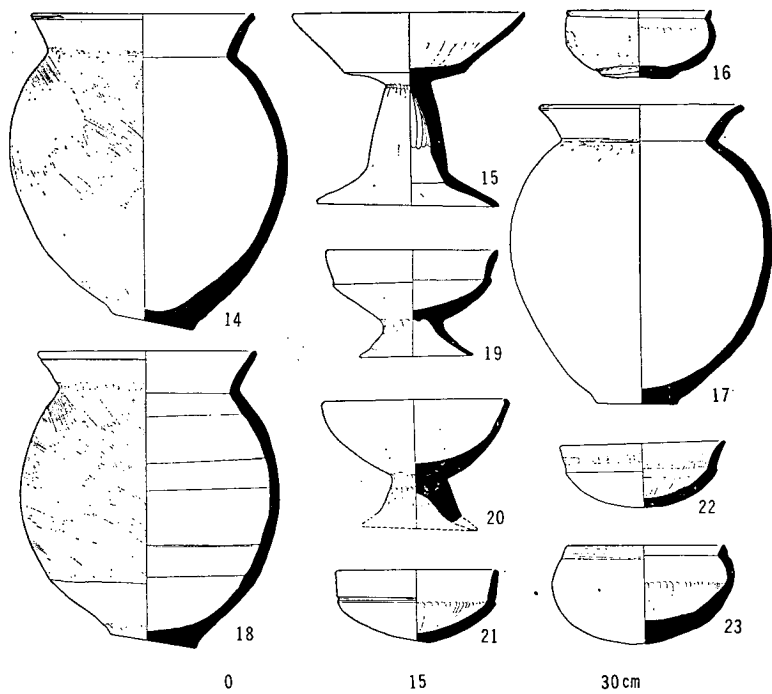
D群

小型壺形土器（五図10）現高七cm、最大径九・三cm、底部径二・五cm。口縁部を欠損しているが、胴部等の張り工合から単調に延びるものと思われる。最大径は胴部のほぼ中央に位する。器面の整形は、内外面ともに篋による手法が用いられ、とくに口縁部と胴部の接合面において密なのが目だつ。焼成、胎土は極めて良好で色調は黄褐色を呈する。なお内面は黒色を呈している。

甕形土器（五図11）器高二十一・五cm、口縁部径十五・五cm、最大径二十cm、底部六cm。口縁部が大きく外反している。最大径は胴中央部よりやや下にある。器面の整形は、そのほとんどが刷毛によるものだが、口縁と胴の接合部では篋による整形がなされている。また口縁の内外面は横なでの痕が顕著で、外面の口縁端には浅い沈線がめぐらされている。胎土・焼成ともに良好で、色調は黒褐色を呈し、胴下半部には煤が付着している。

高環形土器（五図12）器高十六cm、口縁部径十八cm、脚裾部径十四・五cm。環部と脚部の接合部にはするどい稜を有する。脚部は除々に膨みをもつもので裾部に至って大きく曲折する。器面の整形は、口縁部と脚裾部の内外面においてみられる横なでの痕、またそれを除く外面のほとんどは篋によってなされている。そして環内部には篋による放射状の痕跡がみられる。環部のつけ根は非常に厚く、そして脚部内面に臍と思われる突起がはっきりみられる。焼成・胎土ともに良好で、色調は環部が褐色、脚部が黄褐色を呈し、脚裾部の一部に黒い斑点がある。

E群



出土土器実測図第六図 出流原遺跡

壺形土器（五図13）器高九・五cm、口縁部径十一・三cm、最大径十一・三cm、底部径四・五cm。口縁部が外反し、胴部はほぼ球形を呈する。そして口縁部径と胴中央部の径が等しく、この土器の最大径になる。器面の整形は、口縁部ならびに胴上半部においては縦に走る、また胴下半部で横に走るそれぞれ篋による整形がなされている。胎土に若干小石が含まれているが、焼成が良好なため器肉は極めて堅緻である。色調は黄褐色を呈し、口縁部と胴部の接合部において黒い斑黒をみる。

甕形土器（六図14）器高二十四・二cm、口縁部径十七・五cm、最大径二十一・八cm、底部径六・五cm。最大径を胴の中央部にもつ。器面の整形は、口縁部の内外面において横なでの痕が顕著で、また口縁と胴の接合部のところには篋を押しつけている。さらに胴上半部では刷毛、胴下半部では篋による整形がなされている。口縁端には、やや幅の広い沈線がみ

られるが、これは全部めぐらされてはいない。胎土・焼成はともに普通で色調は褐色を呈し、器面全体に煤が付着している。

高坏形土器（六図15）器高十五cm、口縁部径十八・五cm、脚裾部径十四・五cm。坏部と脚部の接合部に明瞭な稜を有している。脚部は裾部に近くなるにしたがって除々に膨みをもつ。器面の整形は、坏部をのぞいてほとんどが篋によるもので、坏部にあつては内外面ともに横なでの痕が著しい。脚部の内面は、その上半部を篋によって大きく削りとり、また下半部では横に走る篋削りが行なわれている。胎土・焼成は普通で、色調は黄褐色を呈する。坏内・外面の一部と脚部の一部に黒い斑点がみられる。

碗形土器（六図16）器高五・二cm、口縁部径十一・三cm、最大径十二・三cm、底部径四cm。最大径が胴部上半にある。口縁部は短いながらも外に曲折する。器面の整形は、口縁部の内外面においては横なでをしており、口縁部と胴部のくびれ部には、内外面に稜を有する。器面の整形は、全て篋によるものである。底部直上には底部を別につくって胴部にはりあわせた痕跡が明瞭である。焼成・胎土はともに良好で、色調は暗褐色を呈する。

F群

甕形土器（六図17）器高二十三・五cm、口縁部径十六・四cm、最大径二十一cm、底部径六・五cm。最大径が胴中央部より、やや上方にある。口縁部は外反するが、端に至ってさらに曲折ぎみを呈する。器面の整形は、口縁部の内外面において横なで痕がみられ、胴部一体は左上から右下の斜走篋整形がなされている。底付近の胴部では風化による剝離がはなはだしく整形痕は明瞭でない。色調は暗褐色を呈する。

甕形土器（六図18）器高二十二・七cm、口縁部径十七・三cm、最大径二十・五cm、底部径六・九cm。最大径が胴中央部に位する。口縁部は他の甕形土器に比して、いくぶん外反の度合が小さい。器面の整形は、口縁部の内外面においては横なでの痕がみられる。胴部でも底部に近いところでは、はりつけによる痕跡が明瞭で、とくにこの部分を篋によって整形されているのが目だつ。内面は全て篋によって荒い削りがなされている。胎土・焼成はともに良好で、色調は黄褐色を呈する。胴上半部には、煤が付着している。口縁端部に細い沈線を一本めぐらしている。

G群

高坏形土器（六図19）器高八・五cm、口縁部径十四cm、脚裾部径九cm。坏部のほぼ中央に明確な稜を有し、口縁部に至って僅かながら外反する。脚部は短いが大きく裾開きをする。器面の整形として、坏部の稜からの上半部と脚裾部は横なでがおこなわれ、明確であるが坏と脚の接合部分は風化によって剝離がはなはだしい。焼成・胎土はともに良好で、色調は赤褐色を呈する。

高坏形土器（六図20）現高九cm、口縁部径十四cm。坏部は丸味をもった器形で、口縁部は内湾を呈する。脚の裾部は欠損しているがほぼ復原することができる。器面の整形は、坏部外面において横なでの痕が、一方内面では筥による放射状の整形痕が顕著である。また脚部では縦走の整形が筥によってなされてある。坏と脚の接合部は、器肉が非常に厚い。胎土には多量の小石が含まれているが、焼成は極めて良好で、褐色を呈する。

坏形土器（六図21）器高五・七cm、口縁部径十二cm。胴部のほぼ中央に一本の沈線をめぐらし、その沈線のところから口縁部が垂直にのびている。底部はとがりぎみの丸底を呈する。器面の整形は、沈線を基準に上方を横なでの整形で、また下方を筥によって研磨している。焼成・胎土はともに良好で、色調は褐色を呈す。底面には黒い斑点がみられる。

坏形土器（六図22）器高五・二cm、口縁部径十三cm。器のほぼ中央に明瞭な稜を有する。器面の整形は、その稜を基準に、上方を横なでの整形痕が、また下方では筥によってきめ細かく整形がなされている。胎土には多量の小石を含んでおり、また焼成も悪い。色調は暗褐色を呈する。

埴形土器（六図23）器高八cm、口縁部径十二・八cm。口縁部は短かく、ほぼ垂直で、その内面には稜を有する。器面の整形は、口縁部の内外面において横なでの痕が明瞭である。胴部から底部にかけては、縦走の筥整形がなされている。焼成・胎土はともに良好で色調は黄褐色を呈する。なお口縁の一部には黒い斑点がみられる。

以上、各群より出土した完形および復原可能な土器について、その特徴を概略的に述べたが、これらの土器以外にも、若干の破片が各々の群より発見されていることを明記しておきたい。

五、総括

出流原遺跡出土の土師式土器は、既述の二十三点がその主なものとなっており、おのおの一括土器を土器群として解釈できる。

〔編年的位置づけ〕それではまず各土器群の編年的位置について述べてみよう。

関東地方における土師式土器は、五領期、和泉期、鬼高期、真間期、国分期の五期(註5)に区分することができ、本遺跡出土の土師式土器をみると、この五期区分のうち、和泉期と鬼高期に属することがわかる。

和泉式土器は、東京都北多摩郡狛江町和泉を標式遺跡とするもので小型壺形土器、埴形土器、甕形土器、甌形土器、鉢形土器、高环形土器、碗形土器等の種類がある。それらの器種はそれぞれ和泉式土器としての特徴を有するが、なかでもとくに高环形土器のそれが著しい。その特徴とは坏部と脚部とが別につくられ、坏部と脚部の接合部分に稜をなし、脚裾部にいたって大きく広がる。また坏部のつけねには、はめ込み式の臍がはっきりとみられるものもある。この特徴が和泉式土器のきめ手として、全国的にその分布を把握することができる。

本遺跡からはその特徴を有する高环形土器が各群を合せて八個出土している。それら八個の土器は和泉式の特徴をもっていながら、脚部において二通りの相違点を認めることができる。一つはその中央が膨みをもつもので脚部に至って大きく開く(第五図3・4・5・6・7・第六図15)。一つはそれに膨みをほとんどたず、脚部において大きく曲折するもの(第五図5・8・12)とがある。いずれにしても、この相違点は高环形土器の局部的な特徴として解釈されるべきものであろう。

またこの高环形土器以外にも甕形土器、壺形土器、碗形土器等があるが、これらもおのおの和泉式土器としての特徴、すなわち甕形土器にあつては、器面の整形手法がすべて篋あるいは刷毛によるもので、刷毛目の存する土器ではさきに刷毛で整形し、後に篋で器面を調整している。また内面は篋によって荒く削りとられてあり、その方向は一様でない。器形は、胴部の中央あるいは中央よりやや下方に最大径をもつ二通りの特徴があるが、いずれも大きな変化はない。壺形土器にあつては二個とも小型である。そして器面は篋によって研磨され光沢さえおびている。これらの器

形は和泉式土器のなかに多くみられる。また埴形土器はその器面を篋で荒く削りとってあるがその器形は和泉期に非常に多くみられ、とくに口縁部がく字状に曲折するのが特徴である。以上のごとくそれぞれの特徴を有しているの
で、A群、B群、C群、D群、E群、F群の土器をすべて和泉式と認めてよい。

つぎに鬼高式土器としては、予備調査で発見したいわゆるG群の土器をあげることができる。

鬼高式土器は、千葉県市川市鬼高(註)を標式遺跡とし、壺形土器、甕形土器、甌形土器、鉢形土器、埴形土器、盃形土器、坏形土器、高坏形土器等、多種の器形がみられる。そしてこれらの器形は、大半和泉式土器からの踏襲であ
って、僅かに変化をみせる。しかし鬼高式土器には独自の器形をもつものがあらわれる。それは坏形土器と盃形土器であるが、ここではとくに坏形土器を問題にして文章を進めたい。

坏形土器は、二種に大別することができる。一つは底部からなめらかに内湾したまま口縁部に達するもので、底部は厚く、口縁部にいくにしたがって器肉が薄くなる。また同じつくりで底部が平底になったものもある。一つは口縁部がたち、口縁部と底部のさかいに段のあるもので、これは須恵器の坏形土器と類似している。それで前者は和泉期からの伝流をひく器形で後者が鬼高期独自に発生する坏形土器の器形である。

ここで、とくに注目したいことは後者の坏形土器である。この器形は須恵器の坏形土器をそのまま摸倣しているようである。そして古い須恵器の坏形土器を摸倣している場合には、やはり土師式土器の坏形土器にも、鬼高期として古い要素をもつ土器を伴って発見されている。そのような観点からもこの種の坏形土器は、関東地方における須恵器の編年にも大きく貢献できるものと思う。

さて、それでは須恵器の器形を土師式土器にとり入れるということについて伊達宗泰・森浩一氏が『日本の考古学』で述べておられるのでそれを引用してみると「須恵器製作が大陸文化の接取の結果として開始されたものであれば、当然これが開始された当時の日本の日常土器である土師器の各種をその新技術で製作することがここからみられるものである。ところが1期の須恵器をみるかぎりでは、在来の土師器の各形態を模倣したものはほとんどみられない」といわれ土師式土器からの須恵器に対しての影響力がきわめて弱かったことを指摘されているがその反面「須恵器生産の中心から遠ざかる土師器として、模倣される器種が非常に増加し、とくに関東や九州では、須恵器の坏形土

器の模作がさかんであった。九州では時には坏形土器の蓋も身も共に模作するが、関東では坏形土器の身も硬化させて多作したようである」という見解を述べておられる。(註8)

事実、両氏が述べたように関東地方では、とくに鬼高期では須恵器の坏形土器を模作した土師式土器の坏形土器がすこぶる多い。そしてその坏形土器が古いものから新しいものへと須恵器の坏形土器の変化と同じく、変遷している。そのような意味においての本遺跡出土の坏形土器(第六圖二十一)は、その器形からみて、須恵器でもっとも古い形を模倣していることがわかる。したがって、この種の土器では、鬼高期におけるもっとも古い坏形土器の器形とみなすことができよう。

それでは、この坏形土器と伴出した各土器はどうであろうか。土器はこれ以外に口縁部が外反する坏形土器と、高坏形土器二個、碗形土器であるが、いずれも鬼高期で古い要素を有している。とくに碗形土器などは和泉期の碗形土器からその器形をそのまま踏襲し、僅か口縁部の外面に変化が認められるのみである。

したがって本遺跡の土師式土器はいままで述べた事柄を考え合せて和泉期から鬼高期へスムーズに継続したということをも物語る資料として貴重な存在であろう。

最近、和泉期と鬼高期の間隙を埋めようという新形式が(註9)提唱されているが、はたして斉一性をもつ、土師式土器の性格から考えて妥当な型式としてみとめられるべきものであるかはなほ疑問である。

〔遺構の性格〕本遺跡の古墳時代における遺構は地質的に明確ではなかった。しかし各群の土器の出土状態ならびに各土器がもつ器形の内容から、ある程度の推定ができる。

まず本遺跡出土の土師式土器を総括し、その器形をみてみると、壺形土器、甕形土器、高坏形土器、坏形土器、碗形土器等の器種があり、そちらはすべて日常の用器として把握されるものであるが、とくに煮沸の用器としての甕形土器の大半にあつては、器面に煤を付着しているところからも裏付けられるものと思う。

ところが本遺跡はこのような日常の生活用器が出土しているにもかかわらず、その遺構を明確にしうることはできなかったといふことは、やはり地質的に不明瞭な点が多かつたという大きな理由からである。

しかし各群の土器が出土する基盤を観察すると、僅かながらそれがロームにくり込んでいたといふ事実もあるの

で、そこに何等かの遺構があったのではないかという解釈もできる。はたしてそれがどのようなプランをもつ遺構であるかは決定しがたいがその面は踏み堅められてはおらず、またその規模から住居址ではないと断言できる。

あえてそのプランを推定すると、土器の出土状態等から、直径約1m前後のはは円形のものと思われる。もしこれが円形のプランをもつものであれば、各土器群の位置関係からみて、ピット状の遺構としてみなすことができよう。しかしそれら、ピット状のものは、はたして日常生活に直接結びつく遺構なのか、あるいは一時的にその場を利用した結果の遺構なのか疑問である。いずれにしてもこの遺構は特殊なものとして把握されるべきものであろう。

ともあれ、出流原遺跡の発掘調査によって、少くなくともここに掲げた土師式土器が世に出たということは、今後土師式土器の研究に対して、いくらかの寄与ができるものと思う。(土器実測は井上裕弘・渡辺恭子・トレース和田雅代の三君による)。

註

- 1 この壺形土器は佐野市公民館に保管されている。
 - 2 杉原莊介、戸沢充則「千葉県天神前遺跡における晩期縄文式土器」駿台史学第十五号(昭和三十九年)
 - 3 大塚初重、小林三郎「栃木県出流原における弥生時代の墓址群」日本考古学協会第三十一回総会研究発表要旨(昭和四十年)
 - 4 杉原初重「栃木県出流原における弥生時代の墓址群」日本考古学協会昭和四十年大会研究発表要旨(昭和四十一年)
 - 5 大塚初重「土師器」日本考古学講座5(昭和三十年)
 - 6 杉原莊介「武蔵和泉遺跡調査概報」考古学十一—五(昭和十五年)
 - 7 杉原莊介「下総鬼高遺跡調査概報」人類学雑誌五十三—十一(昭和十三年)
 - 8 佐藤吉彦、伊達宗泰「土器」日本の考古学、古墳時代下(昭和四十一年)
 - 9 森 浩一「土器」日本の考古学、古墳時代下(昭和四十一年)
- 萩原弘道「土師式文化前期に対する一考察」西郊文化八(昭和二十九年) 萩原氏はこのなかで矢倉台式土器を和泉期と鬼高期の間隙を埋める型式として提唱している。